

論 説

辺 境 の 啓 蒙

— スコットランド啓蒙のアメリカ啓蒙への影響 —

田 中 秀 夫

1. アメリカ啓蒙とは何か — 起源と文脈

18世紀の西ヨーロッパは啓蒙の時代を迎えていた。言うまでもなく啓蒙とは暗黒に光をもたらすという意味であるが、それは言い換えれば、政治的な意味であれ、文化的・精神的な意味であれ、アンシャン・レジームの克服に他ならない。しかしながら啓蒙は大きな犠牲のうえに誕生した。また啓蒙に否定すべき側面がなかったわけでもない。

啓蒙の起源となったルネサンスと科学革命は、理性の力によってヨーロッパ社会の文明化をもたらしたが、宗教改革によってキリスト教世界が分裂し、内外において宗教戦争が勃発し、寛容思想を生み出す一方、さらには文明国同士が覇権争いを繰り広げ、社会全般の危機にさえいたった。16世紀から17世紀にかけての動乱と危機は、中世ゴシック世界から啓蒙の近代への移行を推し進めた。新世界アメリカは冒険者が夢を追う国であるとともに、動乱のなかで排除され抑圧されたピューリタンや貧民などの避難所(アジール)ともなった。

こうして生まれた啓蒙は、一方で異文化間の相互理解の推進を求めつつも、他方では自らの尺度によって異文化を測り、文明の名によって異文化を野蛮とみなし、最悪の場合はそれを殲滅の対象にさえした。自由と寛容はこの時代の啓蒙思想家が理念としてまた時代精神として追求していたものであるが、にもかかわらず啓蒙思想もまた、専制政治や暴力、迷信と無知蒙昧への批判にとど

まらず、理性に対立するもの、非合理的なものすべてを劣ったものとみなす傾向も伴っていた。したがって、啓蒙思想に牽引されたこの時代はヒューマニティの高揚のみならず、むしろ西ヨーロッパにおける啓蒙の展開に比例するかのようになり、ヨーロッパの外部、とりわけアジア、アフリカとアメリカにおいて、ヨーロッパの強欲による異文化社会の支配、それもしばしば物理的暴力による支配を引き起こしてもいた。皮肉なことに植民地奴隷制が急速に拡大したのはこの啓蒙の時代においてであった。

啓蒙はそれ自体の中に、建設性、進歩性、革命性、保守性などの多様性をもっていた。名誉革命以後の英国ではイングランド銀行の設立と公債発行を契機とする財政金融革命を通じて社会の根底的变化がもたらされつつあった。このオーガスタン時代(18世紀前半)のイングランドに登場した(ウォルポールが代表するような)モダン・ウィッグの商業・金融イデオロギーも、それに対抗した(フレッチャーから『カトーの手紙』やボリングブルックのような)ネオ・ハリントンニアン(徳中心の共和主義的な社会思想)も啓蒙の産物であった。啓蒙の合理主義的精神は、ロックからヒューム、スミスへと展開される勤労のイデオロギーを生み出した。投機的商業を批判する思想として登場した有徳な勤労のイデオロギーは平等化の思想(理念)ともなれば、階級分化(帰結)のイデオロギーともなった。こうして啓蒙の合理主義は規律ある「市民的資本主義」(ウェーバー)の精神ともなった。啓蒙は宗教にも影響を与え、寛容と穏健主義を生み出す。そして資本主義と結びついた啓蒙の合理主義は、啓蒙の内部では力による支配を批判したが、しかし、啓蒙の外部では力の支配を生む傾向があった。すなわち、啓蒙の外部では、啓蒙の理性が利益追求と結びついて逆転したのである。啓蒙の内部で抑圧された暴力は、無力な外部に対して容赦なくふるわれた。

啓蒙は自らを生んだ文明にも自己批判の目を向けるようになるとともに、科学と技術を伴った普遍的な理性の思想として、周辺にも波及し、やがて地球全体へと広がることが予想された。啓蒙の伝播は、こうしてそれぞれの地域において伝統との衝突を引き起こし、社会の変革の一大要因となっていく。

アメリカも18世紀には啓蒙の時代を迎えていた。啓蒙思想を生み出したのは旧世界だが、それを実現したのはアメリカである、とある研究者はアメリカ啓

蒙の研究に書きつけている¹。啓蒙の時代を迎えていたとはいえ、牧歌的な自由の国と理解されていたアメリカは、可能性こそ未知であったが、人口においても産業においても、未だ幼弱であった。アメリカは植民地として母国大ブリテンに従属する地位に置かれていた。

王国の栄光を増すためという大義名分のもとに、ウォルター・ローリー²によって着手されたヴァージニア植民地や、ピルグリム・ファーザーズに始まるプロテスタントの亡命の地プリマス（1620年に到着）、クェーカーのウィリアム・ペンに始まるペンシルヴァニアなど様々な歴史的事情をもって形成されたイングランドの北米植民地は、豊穡の地、自由な国として、経済的にも政治的にも急速な発展を遂げた。移民も含めて四半世紀で倍増すると言われた人口は、広大な土地のもつ豊かさによって吸収され、イングランドの非国教徒、スコットランドとアイルランドの長老派がもたらしたプロテスタントの精神と、イングランドを經由して伝えられた自治と共和主義の伝統を基礎とする独自の自由主義的な政治文化によって、次第に統合された。このようにアメリカは独自の特徴を持つ国であったが、独立革命までは、大ブリテンの文化的辺境であった。

プロテスタンティズムと古典古代に淵源する共和主義は本来異なる価値をもつ伝統であったが、アメリカ人の内部で共存し、興隆する資本主義精神と緊張関係をはらみながらアメリカ的精神の起源となった。フランクリンの「時は金なり」に象徴される勤労資本主義を基軸にしてアメリカは経済発展しつつあった。剰余を持つに至った富裕な社会は、必然的に、奢侈の技芸、すなわち文化と思想を発展させ、その結果、様々な職業が成立する。こうして、概括的に言えば、17世紀のプロテスタンティズムから18世紀の啓蒙へとアメリカの文化と思想は成熟して行った。アメリカ啓蒙は、とりわけプロテスタンティズムと共和主義、ロック的自由主義のアマルガムとして特徴づけることができる。そこにはイングランドのような国教会は存在しなかったから、宗教の自由はイン

¹ Commager, Henry Steel, *The Empire of Reason: How Europe Imagined and America Realized the Enlightenment*, Weidenfeld and Nicolson, 1978. Preface (p. 9)

² 櫻井正一郎『サー・ウォルター・ローリー』、人文書院、2006年を参照。

ランドやスコットランド以上に存在した。こうしてアメリカは希望の土地であり、憧れの国となった。

18世紀のアメリカには、フランクリンのような、イングランド、スコットランド、フランスの啓蒙思想家と広く交流する典型的な啓蒙知識人が登場していた。それぞれの地域、国の啓蒙には啓蒙の父というべき人物が存在する。イングランド啓蒙におけるロックや、オランダの啓蒙におけるスピノザやグロティウス、フランス啓蒙におけるデカルト、ヴォルテールやモンテスキュー、そしてスコットランド啓蒙におけるハチスンまたはケイムズのような人物である。ドイツにおいてはライプニッツであろうか。

40年にわたってフィラデルフィアを拠点にして、商人、思想家、政治家として活躍したフランクリンはまさにアメリカ啓蒙の父というべき存在である。フランクリンは、階級的出自も異なれば知識人としてのタイプも異なるものの、その守備範囲の広さからも長い活動期間からも、スコットランド啓蒙におけるケイムズ卿に比すべき人物であった。フランクリン抜きには啓蒙都市フィラデルフィアの発展を考えることもできなければ、アメリカ啓蒙を思い描くことも困難である。アメリカ啓蒙を代表する啓蒙の装置、フィラデルフィア哲学協会がフランクリンの肝いりでできたものであるが、エディンバラの選良協会や哲学協会に対応する。そしてアメリカ啓蒙の一特徴は、スコットランドと同じく、大学が啓蒙の装置として機能したことである。

ペンシルヴァニアには自由を求めたウィリアム・ペンという先駆者がいたとすれば、フィラデルフィアには、政治家、学者、パトロンとして啓蒙を準備した先駆者ジェイムズ・ローガン(?-1751)もいた³。啓蒙思想家フランクリンには先駆者がいた。クェーカーのウィリアム・ペンは国王チャールズ2世から領主権を得て入植した土地を「シルヴァニア」(シルヴァは森を意味する)と名づけた。それにペンの名がついたのである。実際には、スウェーデン人とオランダ人が少し早く入植していた。1682年に建設され州都となったフィラデルフィ

³ コマジャーはローガンをイングランド啓蒙のパトロン、探検家やブラント・ハンターの支援者ジョージ・バンクスに対応する人物だとしている。Commager, *op.cit.*, pp. 4-6.

アは、やがて北部13州の政治経済の中心となるとともに、独立革命の象徴ともなった。その州議会議事堂で1776年7月「独立宣言」が採択され、自由の鐘が鳴らされたのであり、以後1790年から1800年までは合衆国連邦の首都ともなった。

フランクリンが当地にきたのは1723年である。この年にスコットランドでは、アダム・スミス、アダム・ファーガソン、ジョン・ウィザーズプーンが生まれた。ヒュームより5歳年長であるフランクリンは、1706年にボストンの蝋燭屋の子として生まれ、厳格なピューリタニズムの環境で育ち、12歳で腹違いの兄の経営する印刷屋の徒弟となった。信教の自由を許したフィラデルフィアは急速に発展を遂げつつあった。印刷、出版、新聞業で先駆的であったこの都市は病院や慈善施設でも先進的であり、アメリカが誇る国際的な文化都市になりつつあった。1727年にフランクリンは植民仲間とクラブ「ジャントー」(結社)を結成した。1729年に印刷屋として独立した彼は『ペンシルヴァニア・ガゼット』を買収して、刷新するとともに、1732年には暦の出版に着手し、『貧しいリチャードの暦』(1733-58)で成功した。デフォーを尊敬していたフランクリンは儉約と自己教育の精神を説いた。

こうした産業的成功を基礎に、フランクリンは、新興の実業家として、仲間と協力して、1730年には組合図書館、1736年には消防組合、1744年には哲学協会、1751年にはフィラデルフィア学院などのインフラストラクチャを作る一方、やがて力点を科学技術の研究と政治活動に移す。1742年にオープン・ストーブを発明したのち電気の研究を始め、1751年には『電気に関する実験と観察』を出版し、避雷針を提案した。嵐の実験によって雷の稲妻と電気の同一性を証明したフランクリンは、1756年には英国学士院会員に選ばれた。独学で知識人としても最高の栄光にまで上り詰めたと言えよう。

ペンシルヴァニアを代表してロンドンにいたフランクリンは1759年にセント・アンドルーズ大学から法学博士の名誉学位を与えられた⁴。彼は、この年と1771年に二度スコットランドを旅行し、多くのスコットランド人と交友を深めたが、そもそもフランクリンが電気の実験を始めたきっかけは、1743年にエディ

⁴ 以下、Sloan, Douglas, *The Scottish Enlightenment and the American College Ideal*, Teachers College Press, 1971, pp. 1-2.

ンバラ医学校の卒業生、アダム・スペンサーがボストンで行なった「電光」の講義に出たことであった。フランクリンはスペンサーの実験器具を購入して、実験を始めた。そのころグラスゴウの商人デイヴィッド・ホールがストラハンのロンドンの事務所からペンシルヴァニアに向かい、フランクリンの印刷所の協力者となった。有名な印刷業者となっていたストラハンは以後、フランクリンの出版者になるとともに親しい友人とも文通相手ともなった⁵。しかし、アメリカ問題についての両者の見解は次第に異なっていく。ロンドンには親密な友人としてキューカーの医師ジョン・プリングルがいたが、彼はエディンバラ大学の道徳哲学教授になったのち、王立協会の会長を務めた。

フランクリンは1759年のスコットランド旅行から帰ったのち、エディンバラ大学にはいくつかの分野に最高の教授がいるのでそこで学ぶ利益は大きいと、フィラデルフィアの医学生に書いた。医科大学学長のサー・アレグザンダー・ディック、哲学者アダム・ファーガソン、医師のウィリアム・カレン、ジョージフ・ブラック、モンロー父子、歴史家でエディンバラ大学の学長のウィリアム・ロバートソンを挙げている。またフランクリンはこの旅行でアダム・スミス、デイヴィッド・ヒュームと会っており、またケイムズなどを通してこの時代のスコットランドの農業と手工業の改良、社会全般の変革を知ったものと思われる。百科全書的博識のフランクリンの自由な精神は、やがて独立革命世代に受け継がれて、アメリカは独自の建国の軌跡を辿ることになる。

アメリカ啓蒙を代表する思想家として、フランクリンのほかに、ペイン、アダムズ、マディソン、ジェファソン、ハミルトン、ワシントンなどがある。けれども、アメリカ啓蒙にはヨーロッパの啓蒙のような華々しさはない。アメリカが生み出したキャノンは、せいぜいペインの『コモン・センス』や『人間の権利』、マディソン等の『ザ・フェデラリスツ』、アダムズの『アメリカ合衆国の統治構造の擁護』、ジェファソンの『ヴァージニア覚書』などであって、イングランド、スコットランドに比べても、ヨーロッパ大陸の啓蒙と比べても、見劣りがするのも事実である。アメリカは幼弱な文化的辺境であった。

⁵ Cochrane, J.A., *Dr. Johnson's Printer: The Life of William Strahan*, Routledge and Kegan Paul, 1964. esp. pp. 100-120.

けれども、アメリカには「独立宣言」があり「合衆国憲法」があった。この人権宣言を伴う憲法典はまさに啓蒙思想の産物以外のなにものでもない。しかも、アメリカ啓蒙の思想家は、共和国は小国にしか樹立可能でないという経験的準則を批判して、大国に樹立可能である、むしろ公共の福祉を実現する上で、小共和国より大共和国のほうがよいという新しい構想をもたらした。『フェデラリスト』第10編のマディソンによってこの新しい命題が表明された。第9編でハミルトンがモンテスキューを参照して「連邦共和国」を提唱した⁶のをうけて、マディソンはより適切な代表者が選ばれる可能性が大きいことと、党派の危険にさらされる可能性が少ないことをもって、小共和国や民主政よりも、大共和国が優れていると説いた⁷。マディソンは、ハリントンの『オシアナ共和国』を下敷きにして構想された大共和国論としてのヒューム「理想の共和国案」の説を参考にしてこの命題を構築した⁸。実際アメリカは連邦共和国を樹立し、そこに母国で実現していた権力分立の機構を組み込むことによって、歴史に新しい次元を生み出した。

大共和国の形成と結びついた「独立革命」自体が、アメリカ啓蒙の金字塔、テキスト、キャンオンとして後世に絶大な影響をあたえた。それは英国とヨーロッパの自然法思想と共和主義が総合された結晶として理解することができよう。アメリカ独立に集約される「独立革命」の思想こそ、アメリカ啓蒙の中軸にある思想である。アメリカ啓蒙は「建国」の思想を伴わなければならなかったから、「独立、革命、建国」の思想として定義することが可能であろう。

スコットランド啓蒙の世界からアメリカに渡った知識人も多数存在した。そのなかにはウィリアム・スミス、ジョン・ウィザースプーン、ジェイムズ・ウィルソンなどがいたが、彼らは「よきアメリカ社会」の形成にコミットした教育

⁶ Hamilton, Madison, and Jay, *The Federalist with Letters of "Brutus"*, ed. by T. Ball, Cambridge U.P., 2003, p. 37. 齊藤眞・武則忠見訳『ザ・フェデラリスト』、福村出版、1991年、40ページ。

⁷ Hamilton, Madison, and Jay, *op. cit.*, pp. 44-45. 『ザ・フェデラリスト』40-49ページ。

⁸ Cf. Adair, Douglas, "“That Politics May Be Reduced to a Science”: David Hume, James Madison, and the Tenth Federalist", in *Fame and Founding Fathers*, Liberty Fund, 1998, pp. 132-151.

者であった。フランスからは重農主義思想を持ち込んだクレヴクールがいた。彼はアメリカ人についてこう書いた。「偏見も生活様式も、昔のものはすべて放棄し、新しいものは、自分の受け容れてきた新しい生活様式、自分の従う新しい政府、自分の持っている新しい地位などから受け取ってゆく、そういう人がアメリカ人なのです。…ここでは、あらゆる国々から来た個人が融け合い、一つの新しい人種となっているのですから、彼らの労働と子孫はいつの日かこの世界に偉大な変化をもたらすでしょう。…アメリカ人は新しい原則に基づいて行動する新しい人間です。」⁹ イングランドのトマス・ホリスはイングランドの共和主義文献を、ハーヴァード大学やヴァージニア大学にせせと送った¹⁰。トマス・ペインのように、イングランドからアメリカに渡って、独立革命の種をまいた急進主義者もいた。イングランドからのエミグレのなかにはプリーストリのような非国教徒が多数いた。

アメリカ啓蒙にはメイによる先駆的な研究がある。19世紀以降のアメリカを研究していたメイがあえて「アメリカ啓蒙」に参入したのは、信頼すべきアメリカ啓蒙のスタンダードがなかったからであった。以来、多数の業績が積み重ねられて来ており、「アメリカ啓蒙」という概念は今では認知されていると思われる。「アメリカ啓蒙」という問題意識をもって概観した早期の研究と思われる著書においてメイは、穏健派啓蒙、懐疑的啓蒙、革命的啓蒙、教育的啓蒙に分けて論じている¹¹。メイはウィザースプーンを通してアメリカに伝わったスコットランド啓蒙を強調し、スコットランドのアメリカへの影響をコモン・センス学派とほとんど同一視しているが、その後の研究史をサーヴェイしたシャー

⁹ クレヴクール『アメリカ農夫の手紙』(手紙3)、(アメリカ古典文庫2) 研究社、1982年、75-76頁。

¹⁰ Robbins, Caroline, *The Eighteenth-Century Commonwealthman*, Harvard U.P., 1959. Do., "The Strenuous Whig, Thomas Hollis of Lincoln's Inn", in *Absolute Liberty: A Selection from the Articles and Papers of Caroline Robbins*, ed. Barbara Taft, Archon Books, 1982.

¹¹ May, H.F., *The Enlightenment in America*, New York: OUP, 1976. (1. The Moderate Enlightenment 1688-1787; 2. The Skeptical Enlightenment 1750-1789; 3. The revolutionary Enlightenment 1776-1800; 4. The Didactic Enlightenment 1800-1815)

が指摘するように¹²、スコットランド啓蒙の影響もそのような単純なものではない。スローンは注目すべき研究において¹³、スコットランド啓蒙のアメリカへの影響を大学設立運動に焦点をおいて解明した。彼は、とりわけフランシス・アリスン、ジョン・ウィザースプーン、サミュエル・スタンホープ・スミス、そしてベンジャミン・ラッシュの4人に注目している。

アメリカ啓蒙の知的起源としてのヨーロッパ啓蒙自体は、その実、多様であり、多元的である。イングランドの啓蒙思想、スコットランド啓蒙、そしてフランス啓蒙が主要な知的起源となったが、オランダの影響ももちろんあった。ドイツからの影響も無視しがたい。アメリカへの移民のおおよそ30%はドイツ系であった。思想の系譜では、キリスト教(とくに長老派を中心とするピューリタニズム)¹⁴、自然法思想、共和主義などがメジャーな伝統として影響を与えた。そうした伝統の上で人間論、法と統治の歴史論、文明社会史がアメリカにおいても論じられた。以上の簡単な概観からも、アメリカ啓蒙も、案外複雑で多元的な要素から成り立っていることが分かる。

研究史では、フランス啓蒙の影響とロック、イングランドのカントリの思想、あるいはスコットランド啓蒙が、アメリカ啓蒙においてそれぞれどの程度の影響を与えたかという論争が展開してきたことも確かである。アメリカ革命への過程で、腐敗を焦点とする本国のコートーカントリ論争のアメリカ版が繰り返されたという見方もベイリン、ウッド、ポーコックが提出して以来、有力な解釈となってきた¹⁵。本稿はそのような論争に直接立ち入ることは避ける。全体

¹² Sher, Richard, "Introduction: Scottish-American Cultural Studies, Past and Present", in Richard B. Sher and Jeffrey R. Smitten eds., *Scotland and America in the Age of the Enlightenment*, Edinburgh University Press, 1990.

¹³ Sloan, Douglas, *The Scottish Enlightenment and the American College Ideal*, Teachers College Press, 1971. 本稿は本書に多くを負っている。

¹⁴ メイは1991年の著書でアメリカにおけるプロテスタンティズムと啓蒙の関係を論じているが、この問題はウェーバーやトニー以来の古典的なテーマであり続けている。May, Henry F., *The Divided Heart: Essays on Protestantism and the Enlightenment in America*, Oxford U.P., 1991.

¹⁵ Bailyn, B., *The Ideological Origins of the American Revolution*, Harvard U.P., 1967. Wood, Gordon S., *The Creation of the American Republic*, North Carolina U.P., 1969. Pocock, J.G.A., *The Machiavellian Moment*, Princeton U.P., 1975.

としてスコットランド啓蒙との関係を重視しつつ、まず第2節でアメリカ啓蒙の基盤として無視すべからざる長老派非国教徒学院について回顧した後、第3節ではフランシス・アリスンを一瞥し、第4節でウィザースプーンに少し触れつつ独立革命と建国の思想を概観し、最後にアメリカ啓蒙の意義と限界について私見を述べる。第4節の主題も、第5節の問題も巨大であり、本稿が扱えるのはほんの一部に過ぎない。また第2節、第3節の叙述も二次文献に依拠した叙述にすぎないことは著者自身が十分に自覚しているが、わが国においてはこのトピックは疎かになっていないかと思われる。わが国のアメリカ研究に通じていないための見落としを恐れるが、本稿は著者のアメリカ啓蒙研究のための一歩である。アメリカ啓蒙へのスコットランド啓蒙の影響¹⁶、辺境の啓蒙として両啓蒙を結びつけた思想と価値については、行論の途上で言及できるであろう。

2. 長老派学院 — 非国教徒学院と信仰復興運動

アメリカ啓蒙の起源を考えるとときに重要な一つの要素は、非国教徒、ピューリタンのエートスである。とくにアイルランドとスコットランドからの移民が持ち込んだ精神態度はアメリカ精神の起源として無視しがたいものである。彼らは教育熱心な長老派として各地に学院を設立し、それがやがて啓蒙の拠点としての大学へと発展していった。啓蒙の拠点としての大学の重要性は、広義でのスコットランド啓蒙がアメリカに影響を与えた特徴でもあった。しかしながら、スコットランド啓蒙のキャンノンがアメリカの啓蒙知識人、革命世代に影響

¹⁶ スコットランド啓蒙のアメリカへの影響が焦点の一つであるが、スコットランドとアメリカの関係についての研究は相当進んでいる。主要なものは、これまでに挙げたものの他に、Hook, Andrew, *Scotland and America: A Study of Cultural Relations 1750-1835*, Glasgow: Blackie, 1975. Brock, William R., *Scotus Americanus*, Edinburgh U.P., 1982. Landsman, N.C., *Scotland and Its First American Colony, 1683-1765*, Princeton U.P., 1985. Landsman, Ned.C. ed., *Nation and Province in the First British Empire: Scotland and America, 1600-1800*, Associated University Press, 2001. Court, Frankline, *The Scottish Connection*, Syracuse U. P., 2001.

を与えるに先立って、半世紀から1世紀にわたる非国教徒の活動、すなわちスコットランドの長老派およびそれを思想的源泉とするアイルランドのアルスターとイングランドの非国教徒学院の神学の移植、そして非国教徒学院の設立と広い範囲にわたるカリキュラムによる教育の普及、牧師と専門職の育成という持続的な過程が存在した。これは重要な事実であるように思われる。スコットランドに匹敵する、あるいはスコットランドにもまして熱心な教育による社会的主体の形成という努力がアメリカにあったということ、そして熱心な宗教教育にもかかわらず、啓蒙の成果をカリキュラムに取り入れることを排除しなかったこと、むしろそれがその後のスコットランド啓蒙のキャンロンを受け入れる土壌の形成ともなったことは、アメリカの特殊性と言えるかもしれない。

1700年から1776年までの間に20万人以上のスコットランド系アイルランド人がアルスターから北米に渡った¹⁷が、彼らはペンシルヴァニアなどに多数の長老派の学院を設立した。そのなかでも有名なのはウィリアム・テネント (William Tennent) によって設立されたペンシルヴァニアの「ログ・カレッジ¹⁸」(Log College)であった。テネントは1673年に北アイルランドかスコットランドかで生まれ、1695年にエディンバラ大学を卒業して、アルスターでスコットランド長老派教会牧師となり、そのあと、アントリムで国教会牧師に任命された。1718年にアメリカに移住したテネントは非国教徒であると宣言し、フィラデルフィアの宗教会議に受け入れられた。ニューヨークなどで宗教活動にたずさわった後、1727年に血縁のジェイムズ・ローガン (James Logan) —— 彼はペンの秘書で、スコットランド系アイルランド人のクェーカー教徒であった —— の世話で土地を手に入れ、ネシャミニ (Neshaminy) に定住し、やがてログ・カレッジを設立して教育にあたったのである。この学院はその他の学院の源泉と

¹⁷ Sloan, Douglas, *The Scottish Enlightenment and the American College Ideal*, Teachers College Press, 1971, p. 36. スローンによれば1763年から1775年にかけての時期までのスコットランドからのアメリカへの移民はわずかで、この時期でさえせいぜい2万5千人であったという。以下、スローンの詳細な研究を参照して、非国教徒学院の歴史を辿っておきたい。イングランドの非国教徒については Robbins, C., *The Eighteenth-Century Commonwealthman*, Harvard U.P., 1959が有益である。

¹⁸ 英国の場合はコレッジが正確であるが、本稿ではカレッジで統一する。

なるとともに、その卒業生は、やがて長老派牧師を養成することを目的の一つとしてニュージャージー大学を創設することになった。1746年のことである。また彼らは大覚醒（信仰復興運動）でも活躍した¹⁹。

ノース・カロライナの初期の長老派学院としては1760年頃にジェイムズ・テイト（James Tait）によって創設されたウイルミントンの学院と、デイヴィッド・ケア（David Ker）によるクラウフィールド学院があった。彼らはアルスター出身であった。またペンシルヴァニアのバスキングリッジ学院の創設者のサミュエル・ケネディ（Samuel Kennedy）はスコットランドからの移民で、エディンバラ大学で学んでいた。彼の学院からは多数の学生がニュージャージー・カレッジに進んだ²⁰。

アメリカの長老派は1710年以後スコットランド・アイルランド系の移民の増加によって、イングランド系とのバランスが崩れるとともに、両者の間に差異があらわになった。教義の墮落と規律の弛緩を恐れたスコッチ・アイリッシュはウェストミンスター信仰簡条の遵守を強く求め、1727年にはジョン・トムスン（John Thompson）がすべての牧師が信仰簡条に誓約・署名することを宗教会議に提案した。ニューイングランド生まれの牧師たちはこれに反対し、指導者ジョナサン・ディキンソン（Jonathan Dickinson）が信仰の自由を擁護した。1729年の法（Adopting Act）によってウェストミンスター信仰簡条が正しいとされたが、個々の牧師には反対が容認された。この合意は強固ではなく、テネントとその弟子たちは、改悛を説く福音活動を強めた。1740年のジョージ・ホワイトフィールド（George Whitefield）の説教の旅が、ジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards）の影響下にあったニューイングランドの信仰復活派とテネントとの連携を生み出し、こうして信仰復興運動が植民地各地に広がっていく。エドワーズがこの運動の知的指導者と認められ、ディキンソンやエアロン・バー（Aaron Burr）などのニューイングランド長老派も1740年までにこの運動に加わった。

教育への姿勢と教育理念が、長老派のなかでの「ニュー・サイド」New Side

¹⁹ Sloan, *op. cit.*, pp. 41-42. (以下 Sloan とのみ表記する)

²⁰ Sloan, p. 42.

と「オールド・サイド」Old Side——当時長老派の信仰回復派と反対派がそう呼ばれた——の争点となる²¹。前者は熱狂的過ぎるとも見られたし、その学院のカリキュラムでは神学が優先されたが、しかし宗教に限られず、古典、歴史、自然科学、道徳哲学など広い範囲の知識が教えられた。彼らはまた悔い改めを説く必要上、修辞学も重視した。ホラティウス、プラトン、タキトゥス、キケロなどの古典とともに、アディスン、ポープ、ホイットフィールド、トマス・プリンスなどが言及された²²。

スローンによれば、ニュー・サイドの教育運動には二つの局面が区別できる。第一は学院を各地に設立して信仰復興を推進する局面であり、第二の局面はニュージャージー・カレッジ設立運動である²³。

第一の、テネントの教え子による学院建設としては、サミュエル・ブレア (Samuel Blair) の「ファッグズ・マナー (Fagg's Manor) 学院」とサミュエル・フィンレイ (Samuel Finley) の「ノッティンガム (Nottingham) 学院」が有名で、サミュエル・デイヴィス (Samuel Davies) はファッグズで学んだ。デイヴィスは後にニュージャージー・カレッジの学長になるが、ハノーヴァーにおける長老会の形成にあたっての協力者に、フィンレイの学院の卒業生のジェイムズ・ワッデル (James Waddell)、ニュージャージー・カレッジの卒業生のジョン・トッド (John Todd) がいた。二人はトッド学院の創設に努力し、トッドはハンプデン・シドニ・カレッジ (Hampden-Sydney College) の基礎をおいた。ブレアの学院の出身者にはロバート・スミス (Robert Smith) がいて、ペンシルヴァニアのパクア (Paquea) に学院を設けた。ロバートはサミュエル・スタンホープ・スミス (Samuel Stanhope Smith) とジョン・ブレア・スミス (John Blair Smith) の父である。二人はそれぞれニュージャージー・カレッジとニューヨークのユニオン・カレッジ (Union College) の学長になった。

スミスの教え子には、ニュージャージーを出て、ペンシルヴァニア大学の学長になったフレデリック・ビーズリー (Frederick Beasley) や、ノース・カロ

²¹ Sloan, pp. 42-44.

²² Sloan, p. 50.

²³ Sloan, p. 55, 58.

ライナで50年以上にわたって学院を運営したデイヴィッド・コールドウェル (David Caldwell) がいる。またペンシルヴァニア西部で布教し、後にジェファソン・カレッジ (Jefferson College) の中心となったジョン・マクミラン (John McMillan) もスミスの教え子であり、彼らはアルスターの学院の伝統を継承した²⁴。

1742年にテネントが引退しログ・カレッジが閉鎖された。長老派とニューイングランドの俗人は協力してそれに代わるものとしてニュージャージー大学の設立に取り組んだ。1756年にプリンストンに移転するが、この大学は福音派牧師を養成する確固たる組織として、地域社会から法的認可を受けた組織であり、財政的支援も受けるものとして、従来の学院とは違っていた。学院は大学のモデルとなったが、後には大学教育のための予備教育の役割をもつようになった²⁵。そもそも学院の教育は牧師養成に限られていたわけではない。古典と教養教育が重視されたが、それは牧師を含めすべての専門職に基礎的と考えられていた。例えばフィンレイは、ノッティンガム学院ではギリシア・ラテンの古典、論理学、代数、地理、幾何、存在論、自然哲学、光学などが教えられたと伝えている²⁶。甥のベンジャミン・ラッシュは規律の厳しいノッティンガムに学び、ニュージャージー・カレッジを経てエディンバラ大学に留学して、直接スコットランド啓蒙にふれて医師となって戻った。フィンレイは英語を正しく読み話す訓練を重視し、子供たちに実践的農業に触れさせた。長老派学院における古典の重視はアルスターとスコットランドの伝統の影響であった²⁷。

パーとフィンレイは教科書と科目に関してオールド・サイドが設立したエールを参考にした。ウィリアム・シッペン (William Shippen) はニュージャージー・カレッジに1751年から54年まで在学したが、初年度にギリシア語でクセノフォンとキケロを読み、ヘブライ語文法、ウォットの論理学、地理学、天文学、修辭学を学んだ。翌年、古典の勉強を続け、修辭学と自然哲学を深め、三年次に

²⁴ Sloan, pp. 55-56.

²⁵ Sloan, p. 58.

²⁶ Sloan, p. 61.

²⁷ Sloan, p. 63.

は自然哲学を続けるとともに倫理学と道徳哲学を始め、最後の年には全体の復習をした²⁸。ニュージャージーの最初の学長はバーで、1757年からはエドワーズがなった。1759年にデイヴィスが引き継いだ但、1761年からフィンレイが継承した。フィンレイはバー時代のカリキュラムを踏襲しつつ、天文学を加え、英語を重視して、学生にシェイクスピア、ミルトン、アディスンなどの近代の作家を読ませ、最後の2年にはラテン語と英語の公開討論をさせた。フィンレイは英語とラテン語の文法学校を併設したし、自らギリシア語、ラテン語、ヘブライ語を教えた。このようにニュー・サイドは学習を疎かにしているという非難を克服するために、彼らは教育を時代に合うものにしようと努めた²⁹。

ニュージャージー・カレッジの形成に影響を与えた事情として、まず「ログ・カレッジ」と「エール」の影響がある。イングランドの非国教徒学院の影響もあった。アルスターの長老派学院とイングランドの非国教徒学院は同類であった。オックスフォードとケンブリッジから非国教徒は排除された。アルスターではスコットランドの大学へ進学するので大学の必要はあまりなかった。アメリカでは長老派の学院は、イングランドの非国教徒学院と同じく、大学レヴェルの制度になる必要があった。そこでニュージャージー・カレッジはイングランドの非国教徒学院に注目した。第一に、彼らは18世紀中葉までに近代的なカリキュラムと進歩的な教授法で有名であった。ハートリブ、デュリ、ペティ、ミルトンなどのピューリタンの教育改革思想を継承していた彼らは教育の刷新を望んでいた。1680年代から90年代にかけて、シュルーズベリ、シェリフヘールズ (Sheriffhales)、ニューウィントン・グリーンのような学院は英語の使用と実験を導入した講義、および科学的、実用的科目という点でスコットランドの大学に先行していた。オランダの大学との接触、スコットランドとの密接な関係が、新しい思想の源泉となり、専門職を目指す非国教徒の期待に応えた。学院ごとに教育内容に大きな差があったが、フィリップ・ドッドリッジ³⁰や

²⁸ Sloan, p. 63.

²⁹ Sloan, p. 64.

³⁰ Philip Doddridge, 1702-1751, 非国教徒神学者、ロンドンに生まれる。父は商人。母はブラハから迫害をうけて英国にわたったルター派牧師の娘。長老派の影響を受け、1714年にキプワースの自由主義的な非国教徒学院に入る。1723年にキプワースの牧師。

リーストリなどはアメリカでもよく知られていた³¹。

第二に非国教徒学院という境遇自体がアメリカにはアピールした。ヴァージニアの非国教徒のために、イングランドの非国教徒が得ていた寛容法のもとの保護と同じ特権を得ようとしたサミュエル・デイヴィスはイングランドの非国教徒牧師に接触した。彼とエドワーズ、パー、フィンレイはノーサンプトン学院のドッドリッジやケンダル学院(Kendal Academy)に関係のあったベンジャミン・エイヴェリ(Benjamin Avery)と文通していた。話題は宗教上のことに限らず、カリキュラム、教科書、教育方針などにわたっていた。

またオールド・サイドがすべての長老派牧師にスコットランドとニューイングランドの大学の学位を与えるように要求したことがニュー・サイドには我慢ならず、イングランドの学院が彼らを引き付けた³²。

ドッドリッジのノーサンプトン学院の影響力は大きかった。ドッドリッジが学院を開設したのは1729年で、1751年の死まで学院長であった。彼は聖職につく者にも他の専門職に進む者にも役に立つように広範囲のカリキュラムを用意したし、教授法に配慮し、実用科目も用意した。自身はキリスト教の検証論を好んで教えたが、最新の科学の成果も無視せずに教えた。彼はラテン語ではなく英語による教育を普及し、英作文によって正しい英語を習得する方法を重視した。聖職者の教育では説教術と実践神学も重視された。彼は古典を重要視したが過大に強調すべきではないとして、フランス語を選択科目として提供した。自然史、市民社会史、教会史もカリキュラムの重要な科目とされた。こうしたノーサンプトンの教育からニュージャージー・カレッジの指導者は多くを学んだ³³。

1729年にマーケット・ハーバラで学院を開く。同年にノーサンプトンへ移り、1730年に長老。同年『非国教徒の利益を回復する最もありうる手段に関する自由な考察』刊行。アリウス主義を容認。1736年に(スローンは同年と翌年とする)アバディーンの向カレッジから神学博士。200人の学生に数学的、スピノザ的な仕方哲学と神学を講義。多忙と膨大な手紙のやりとりが説教と教育を妨げた。1737年にノーサンプトンにおいて慈善学校を始める。1743年カウンティ(州)病院の設立に参加。療養のために渡ったリスボンで死去。有名な賛美歌作者。『魂における宗教の興隆と進歩』(1745)、『精神学、倫理学、神学講義』(1763)など。

³¹ Sloan, pp. 65-66.

³² Sloan, p. 66.

³³ Sloan, pp. 65-67.

ともあれ、やがてスコットランドの大学の影響が学院の影響を凌ぐようになる。ウィザースプーンが来る以前にニュージャージーの指導者はスコットランドの大学に注目していた。そもそも1662年の創設以来、イングランドの非国教徒学院はエディンバラとグラスゴウの長老派に関係のある大学ときわめて親密な関係をもっていた。名誉革命後、スコットランドの大学が長老派の影響下に置かれるや、イングランドの非国教徒は学問と学位を求めてスコットランドを目指した。奨学金も用意された。エディンバラ大学のイングランド非国教徒学生は世紀の転換期にはきわめて多数となり、学長のカーステアズは彼らは大学の中の大学となっていると述べた。グラスゴウ大学はさらに多くの非国教徒学生を擁していた。18世紀になってからもスコットランドの大学のイングランドの学院への影響は衰えるどころか、むしろその威信の高揚によって増大した。スコットランドの大学の実際の進歩的な精神は称賛され、18世紀の中葉には、スコットランドの思想、教授法、その教科書がイングランドの学院に導入された³⁴。

スコットランドの大学の学位は非国教徒には重要であった。18世紀において、イングランドの25の学院の47人の教師がスコットランドの学位をもっていた。うち27人がスコットランドから学士号を得た。19人は名誉博士学位を得た。

ニュージャージーの教師が強い関係をもっていたノーサンプトン学院とケンドル学院はスコットランドの強い影響を受けていた。ケンドル学院の創設者であったケイレブ・ロザラム (Caleb Rotheram) はイングランドのホワイトヘイヴン学院 (Whitehaven Academy) で学んだが、部下の教師はスコットランド人で、エディンバラ大学にて学士号を得たジョン・パークリと、エディンバラから名誉学士号と神学修士を得たトマス・ディクソンであった。ロザラム自身もエディンバラにて学士号を得た後、論文によって神学博士ともなった。ロザラムの教え子の中には有名なウォリントン学院の創設者となったジョン・セッドン (John Seddon) がいたが、彼はスコットランドの大学に進んだ。グラスゴウ大学で学位を得たセッドンはウォリントン学院で、フランシス・ハチソンの倫理学を教えた³⁵。その詳細は未だ解明の余地がある。

³⁴ Sloan, pp. 67-68.

³⁵ Sloan, p. 69.

ドッドリッジは1736年にアバディーンのマーシャル・カレッジから、1737年にはキングズ・カレッジから名誉学位を授けられた。キブワース (Kibworth) での彼の最初の教え子であるジョン・エイケン (John Aiken) はキングズ・カレッジで学士号を得たのち、ノーサンプトンで助講師を務めた。他の助講師であるブラバント (Thomas Brabant) は1736年から40年にかけてグラスゴウ大学で学び、ジェームズ・ロバートソンはエディンバラ大学の東洋語の教授となった³⁶。ブラバントもハチスンに教わったと思われるが、1737年から40年にかけてアダム・スミスもグラスゴウ大学に学んでいた。二人に関係があったのかどうかは分からない。

イングランドの非国教徒学院とスコットランドの大学の緊密な関係がアメリカ人とスコットランド大学の関係の形成に貢献したことは、サミュエル・フィンレイがよく示している。1761年にニュージャージー・カレッジの学長職をデイヴィスから受け継いだフィンレイはイングランドで著名となっており、サミュエル・チャンドラー (Samuel Chandler) などの非国教徒牧師と手紙の交換をしていたが、チャンドラーは1763年にフィンレイのおかげでグラスゴウ大学の神学博士学位を得た。フィンレイはリーチマンとも知り合っており、1764年にエディンバラのウィリアム・ホッグ (William Hogg) に紹介してもらったお礼の手紙を書いた。リーチマンはハチスンの同僚として著名な神学者であった。

1753年から翌年にかけて、デイヴィスとテナントは大学設立基金を集めるために大ブリテンに旅をした。そのとき、彼らはイングランドの非国教徒学院を訪問して、彼らが異端的見解に近づいているとの印象を受けた。スコットランドで彼らは福音派に出会い、アメリカの将来の大学に対する関心も見出した。レーヴン伯爵やロージアン公爵がスコットランド教会の総会で、大学への支持を表明したし、スコットランドのキリスト教知識普及教会からの支持も得た。またグラスゴウのウィリアム・リーチマン、アバディーンのカレッジのジョン・ラムスデン、エディンバラのパトリック・カミング、ロバート・ハミルトン、ジェームズ・ロバートソンなどから支援を得た。彼らの募金は3千200ポンドになったが、大半はスコットランドで集めた³⁷。

³⁶ Sloan, pp. 69-70.

³⁷ Sloan, pp. 69-70.

スローンの見解では、初期のニュー・サイドとスコットランドの関係で最も親密だったのはジョナサン・エドワーズを介する関係であった。スコットランドの教会関係者は、1737年にロンドンで出版された『神の驚異的な作品についての信仰厚い物語』(*Faithful Narrative of the Surprising Work of God*)によってノーサンプトンにおけるエドワーズの信仰復興のことを聞いていた。アメリカにおける信仰復興(大覚醒)は1741年のスコットランド西部、キャンバスラング(*Cambuslang*)における信仰復興運動の発生を刺激した³⁸。キャンバスラングにはアメリカ旅行から帰ったばかりの神出鬼没のジョージ・ホイットフィールドが現れたことで、両地の関係が如実となった。エドワーズとスコットランドの福音派牧師の親密な個人的関係は明らかである。ジョン・ブラウン博士、ジョン・マクローリン、ジョン・アースキン、トマス・ギリスピー、ウィリアム・マカロック、ジョン・ウィルスンなどのスコットランドの牧師がエドワーズと手紙を交換し、エドワーズの著作を編集してスコットランドで出版した。こうして国際的な福音主義の結合関係が構築されていった。エドワーズがノーサンプトンの教会を追放されたとき、カーキンティロツホの牧師であったジョン・アースキンや、ジョン・マクローリン(数学者の兄弟)は、彼を支援した。アースキンはとくにエドワーズを支援した。彼はエドワーズに支援物資や本を送るとともに、スコットランドでの彼の著作の出版に尽力したし、ニュージャージー大学に彼が示した関心もエドワーズを尊敬したからであった。彼はデイヴィスとテネントをスコットランドで受け入れた一人であった³⁹。

このようにして、ニュージャージー・カレッジ、後のプリンストン大学の礎石が据えられた。それまで北米にはハーヴァード(1636年)、ウィリアム・アンド・メアリ(1693年)、エール(1701年)の3大学があった。ハーヴァード大学はイングランドの非国教徒によって創設されたが、イングランドの非国教徒学院は、そもそもスコットランドの大学と密接な関係があったから、スコットランドの大学の間接的影響はハーヴァードに伝えられたであろう。1692年にハー

³⁸ Fawcett, Arthur, *The Cambuslang Revival: The Scottish Evangelical Revival of the Eighteenth Century*, The banner of Truth Trust, 1971を参照。

³⁹ Sloan, pp. 71-72.

ヴァード・カレッジの副学長に任命されたチャールズ・モートンはロンドン近郊のニューウinton・グリーン学院の牧師であり教師であった。オックスフォードの卒業生であったモートンは数学に秀で、弟子のダニエル・デフォーによれば、幅広いバランスの取れた授業を行なった。モートンは、学院に現代語の研究を導入し、英語で授業を行なった。彼が書いた『自然学概要』は1687年にハーヴァードで教科書に採用され、以後40年間自然科学の教科書として使用された⁴⁰。

その後、スコットランド人が関係したキングズ・カレッジ(後のコロンビア大学, 1754年)、フィラデルフィア大学(後のペンシルヴァニア大学, 1756年)、ロードアイランド大学(後のブラウン大学, 1764年)が相次いで設立された。⁴¹ こうして母国の6大学を上回る7大学を植民地は擁し、学問に力をいれることになる。母国の6大学のうち4大学はスコットランドの大学であり、イングランドには2大学しかなかったことを考えると、アメリカ啓蒙の拠点としての大学の地位は明らかであろう。

3. フランシス・アリスン——オールド・サイドの啓蒙

フランシス・アリスンは、「ニュー・サイド」と対抗した「オールド・サイド」を代表する人物であった。彼は1705年にアルスターのドネガル州(Donegal County)に生まれ、当地の学院を経てエディンバラに学んだ。グラスゴウでも学んだかもしれないが、32年に卒業している。彼はヒュームより少し上の世代である。1755年にはグラスゴウ大学から名誉神学博士学位を得た。アリスンはスコットランドの大学改革で有名なジョン・ステイーヴンソン(1730年から1775年、エディンバラ大学論理学形而上学教授)とフランシス・ハチスン(1730年から1746年、グラスゴウ大学道徳哲学教授)から大きな影響を受けた⁴²。

ステイーヴンソンはラムスの古い論理学ではなく、ロックとハイネキウスに

⁴⁰ Sloan, pp. 89-90 note.

⁴¹ Court, *op. cit.*, p. 16-17.

⁴² Sloan, pp. 75-76.

力点を置いた。彼はロックをスコットランドの大学に導入した嚆矢であった。人気を博した修辞学では、アリストテレスの『詩学』とロンギヌスの『崇高について』を用い、古代と近代の作家を比較しつつ学生に文芸の趣味と批評(文学と美学)を教えた。アレクザンダー・カーライル、ウィリアム・ロバートソン、D・ステュアート、ジョン・アースキンなどが彼の講義を称賛した⁴³。

アリスンはハチスンをよく知っていた。1746年に、ニューロンドンの彼の学院で使う教科書とカリキュラムについて、アリスンはハチスンに教えを求めている。ハチスは英語で授業をしたし、講義の仕方では卓越していた。彼は古典文学研究を育て、道徳哲学の範囲を拡大し、学生とは親しく接した⁴⁴。アリスンはニューロンドンとフィラデルフィアでスコットランドの影響を受けた講義を行った。学業は英語の文法と作文、ラテンとギリシア語の授業、美文学などの勉強から始まり、上級になると道徳哲学と自然哲学を学んだ。古典語だけでなく、精神を広げる教養科目と科学を重視したアリスンの教育によって優れた弟子が育った。ニューロンドンにてアリスンに学んだヒュー・ウィリアムソン(Hugh Williamson)は1761年から3年間フィラデルフィアの数学教授を努め、その後、エディンバラとユトレヒトで医学を学んだ。彼は医師として自然科学の研究を続け、政治でも活躍し、ノース・カロライナ州の歴史を書いた⁴⁵。

同じくニューロンドンでアリスンの指導を受けたジョン・イーウイング(John Ewing)は、ニュージャージー・カレッジに進み、アリスンのもとで神学を研究し、フィラデルフィアの第一長老派教会の牧師となったが、1779年にペンシルヴァニア大学の自然哲学教授に任命された。彼はアメリカ哲学協会の副会長も努めた。彼はスコットランド人のトマス・ドブスン編『ブリタニカ百科事典』アメリカ版初版(1798年)に「天文学」を執筆し、1808年に『自然哲学講義』を出版している。大陸会議の秘書として有名なチャールズ・トムソン(Charles Thomson)は1751年にフィラデルフィア学院(フィラデルフィア大学の一部となった)に入り、ラテン語とギリシア語の最初の講師となった。古

⁴³ Sloan, p. 76.

⁴⁴ Sloan, pp. 76-77.

⁴⁵ Sloan, p. 78-79.

典研究に強かったが、彼は科学技術の振興にも関心が深く、アメリカ哲学協会の創設に指導的役割を果たした。またジェファソンの『ヴァージニア覚書』(1785年)の草稿の準備にも貢献した。トムソンのコメントはその初版と第二版の付録に収録された。この3人は1769年の金星と水星の軌道を観察するためにアメリカ哲学協会が設けた委員会を支援した⁴⁶。

アリスンは学問と実用科学の振興のために教会の説教を利用した。1758年の「祖国愛について」の説教では、真の愛国心の発露として「勤労、農業、および家内手工業」の振興を求めた。それまでにアリスンは牧師の寡婦の救済とその子供の養育のための支援をスコットランドに求めた。こうして1759年に「スコットランド計画」が採用され、長老派牧師基金が法人となった。基金は図書館も設け、遠方の牧師や教師に本を貸し出した。

アリスンはまたニューワーク学院(Newark Academy)のために、イーウイングとウィリアムスンによる募金旅行を計画し、大ブリテンとアイルランドのキリスト教徒への募金の訴えを書いた。フロンティアにおける人口の急増は牧師と公共の指導者を多数必要としており、「農民の息子はすべてのわがフロンティアの住民のために牧師と為政者を持たなければならない。さもなくば、彼らは無知、放縦、あらゆる有害な結果に陥ってしまう。」教育の機会が増し、文明化をもたらす宗教と科学によって群集の気質を穏和にすることが必要である。ニューヨーク、ニュージャージー、フィラデルフィアの3カレッジがあるにもかかわらず、植民者の利用は少ない。それらは遠く、高くつき、都市の悪影響も心配である。ニューワーク学院ができれば、農民の必要は満たされるであろう⁴⁷。

不運が重なって、募金旅行は成功しなかった。まずボストン茶会事件が起こった。さらにニュージャージー・カレッジの学長をしていたウィザースプーンが、ニューワーク学院の対抗を恐れて、募金にあたった二人の正統性が疑わしいという手紙をブリテンの友人に書いて妨害した。しかも、ウィリアムスンがロンドンで恋に落ちて、イーウイングは単身でスコットランド旅行をしなければならなくなった。しかし、スコットランドで彼は熱狂的な歓迎を受けた。グラスゴ

⁴⁶ Sloan, pp. 79-80.

⁴⁷ Sloan, pp. 80-81.

ウ、モンローズ、ダンディー、パースは彼を快く迎え、エディンバラは神学博士学位を与えた。募金はさほど集まらなかったが、学院はでき、1834年まで続き、デラウェア・カレッジと合併する⁴⁸。

フィラデルフィアに学院とカレッジを建てようという気を起させたのはアリスンのニューロンドン学院であった。アリスンはペンシルヴァニアのニューロンドンで1742年から学院を運営していた。当時フィラデルフィアの長老派会議はニュー・サイドと対抗して宗教学校をつくらうと考え、スコットランド教会の総会に支援を求めたりしていたが、1744年にアリスンの学校を支援することになった。その結果、生徒の受け入れをエールと調整し、図書館のために本が集められ、ロンドンとスコットランドで募金が行なわれた。アリスンの指導下で学院は9年間活動したが、アリスンの給料が払えなくなり、アリスンは1752年にフィラデルフィアの学院の牧師に転じ、数年後に、フィラデルフィアのカレッジの副学長、論理学と道徳哲学の教授となった。それによってオールド・サイドの関心もフィラデルフィア・カレッジに移った⁴⁹。

フランクリンの『青年の教育案』(*Proposals for the Education of Youth*, 1749)は伝統的な古典教育に代わる代替案を提出したものであるが、その知的源泉はハチスン、フォーダイス、ターンブルであった。その代替案は1751年のフィラデルフィア学院慈善学校の創設によって制度化され、1755年にはフィラデルフィア・カレッジとなった。ここにアリスンとスミスは迎えられた。スミスは『教育についての考察』(*Thoughts on Education*, 1752)において、シャープツベリとハチスンを引用して、公共生活を目指す教養教育(liberal education)が優れていると主張した⁵⁰。

アリスンのフィラデルフィアの学院への移動はフランクリンの命による。フランクリンはアリスンの学識を尊敬していた。アリスンは国教会牧師ウィリアム・スミスによってフィラデルフィアのアカデミーに加えられた。スコットラ

⁴⁸ Sloan, pp. 81-82.

⁴⁹ Sloan, p. 57.

⁵⁰ Miller, Thomas, "Introduction", *The Selected Writings of John Witherspoon*, Southern Illinois U.P., 1990, p. 19.

ンド人のスミスは1743年から4年間、アバデューンのキングス・カレッジで学んでいた。二人は学位授与権をもったカレッジの設立をフィラデルフィア学院の理事に提案した。やがて、フィラデルフィア学院慈善学校の教務長にスミスが、副教務長にアリスンが任命された。当初道德哲学はスミスが担当したが、すぐにアリスンが引き継いだ。アリスンは道德哲学、論理学、古典、形而上学、地理学を死までここで教えた⁵¹。

スミスが招聘されたのは1753年刊の『ミラニア・カレッジ案』(*A General Idea of the College of Mirania*)がフランクリンの目にとまったからである。スミスの想像上の教程案はアリスンの教育案とよく合い、フィラデルフィア・カレッジのカリキュラムの基礎となった。スミスの基本的想定は「神学、法、自然学、農業、および国家の主要な職務」を学ぶ教育専門職のクラスと「機械的職業、その他のすべての国民のために設計された」クラスに大別するものであった。機械学校の生徒は英語と将来の職業に役立つ実際的な科目を学んだが、この学校はフランクリンが構想したフィラデルフィアの英語学校に酷似していた。スミスは若い紳士の教育に最も関心があって、古代語を基礎とする教養科目と最新の人文科学と自然科学を含む教程を考えた。その着想は1753年のアバデューンの両カレッジのカリキュラム改革による。フィラデルフィアの教程は3年からなり、古典が修辞学、文芸批評、作文とともに3年間通して教えられ、初年度には論理学と形而上学が教えられたが、論理学はアバデューンの教授、ウィリアム・ダンカンの『論理学』を教科書にした。論理学と形而上学はアリスンが担当する2学年の道德哲学の入門とされた。

フィラデルフィアは上級の3年コースとして数学、自然哲学、自然史、天文学および化学を提供した。スミスの数学教育は充実しており、読書リストにはデイヴィッド・グレゴリ、コリン・マクローリン、ジョン・キール、ロバート・シムスンなどの重要なスコットランドの哲学者が含まれている。フィラデルフィアではマーシャル・カレッジに倣って、担任制(regenting system)を廃止し、専門教授制を導入した⁵²。

⁵¹ Sloan, p. 83.

⁵² Sloan, pp. 83-84.

アリスンとスミスの関係はよくなかった。スミスはフィラデルフィアに来るや、国教会牧師を植民地に任命するよう運動した。アリスンはフィラデルフィア・カレッジへの国教会の影響力を警戒した。にもかかわらず、二人は教育では協力した。彼らは教育理念の多くを共有していたし、スコットランドの大学での教育という背景でも類似しており、しかもスミスの自然哲学とアリスンの道徳哲学は補完的であった。アリスンの英語重視は古典語の基礎を持つ点で、スミスと共通であったし、フランクリン以上に人文学に傾斜していた。スコットランドの3大学の影響は二人を通してフィラデルフィアにもたらされ、1765年に医学校が設立されて他の重要なスコットランドの影響が加わった⁵³。

アリスンの影響力はフィラデルフィア・カレッジとニューワーク学院に限られなかった。ニューイングランドの指導者、とくにエルザ・スタイルズ (Erza Stiles) との接触によって、ハーヴァードとエールはますますスコットランドの大学に注目するようになった。1755年にアリスンはエールから名誉博士号を得た。スタイルズとアリスンも相当程度、共通の教育観・宗教観をもっていた。彼らはエディンバラの地位を最高とし、グラスゴウを次と見なしていたが、スタイルズは1765年にエディンバラから名誉博士号をうけ、文通相手の一人のジョン・アースキンから本を送ってもらった⁵⁴。

アリスンは道徳哲学の教師としてハチスンの思想をアメリカに導入した。スコットランドの道徳哲学はニュージャージーとフィラデルフィアのカレッジに決定的な影響を与えた。ニュー・サイドもハチスンの影響を受けていた。アリスンはハチスンの道徳哲学を全面的、無批判的に採用したとは、スローンの見解である。ハチスンの『道徳哲学入門』の要約版を学生に持たせ、形而上学の講義でもハチスンに依拠した。「人間の靈魂」、「存在一般」、「神の存在と屬性」といった見出しは伝統的であるが、合理主義的形而上学ではなかった。アリスンは理性ではなく内的感情を重視するシャーフツベリとハチスンの見解を継承した⁵⁵。

⁵³ Sloan, p. 86.

⁵⁴ Sloan, pp. 86-88.

⁵⁵ Sloan, pp. 88-89.

アリスンはハチスンの「内的感覚」を教えた。美的感覚、「それによって我々が人類の喜びと苦しみのすべてに関心を抱く、共通感覚あるいは社会的傾向」、名誉感覚、嘲笑の感覚、そして道徳感覚である。道徳の真の基礎は道徳感覚によって導かれた仁愛にあるというハチスンの見解が継承された。ハチスンなどのスコットランドの思想家は、自らはベーコンとニュートンの方法、単純な帰納的経験論を実践していると考えていた。人間本性に適用されたこの帰納法は人間社会の、その構造、関係、制度にも適用された。アリスンは「倫理学の原理」、「自然法の原理」、「経済学と政治学の原理」という3分類のもとでハチスンの『入門』の要約をして学生を教えた。ハチスンは実践倫理も説いたが、長老派牧師としてアリスンもまた正しい行為に関心があった。こうしたハチスンの思想は、アリスンなどによって早くにアメリカに導入されていたのである⁵⁶。

アリスンは「真性ウィッグ」(Real Whig)としてのハチスンの政治思想からも影響を受けていたと思われる。ロビンズが真のコモンウェルスマンと特徴づけたハチスンは、スローンによれば、「政治的カルヴィニズム」の伝統を代表する思想家であった。自然権、契約と同意による統治、人民主権、抵抗権からなる思想体系はカルヴィニストによって伝えられたが、スコットランドは抵抗権論に関しては特に大きな貢献をしていた。メアリ女王とのノックスのたたかい、ジェームズ6世に対するアンドルー・メルヴィルの対抗、サミュエル・ラザフォードの彼の『法と王』(*Lex Rex*, 1644)などはよく知られている。この伝統はグロティウス、プーフENDORFなどの大陸の自然権学派によって発展されるとともに、イングランドではシドニ、ハリントン、ミルトン、ロックなどのコモンウェルスの伝統によって継承・洗練された。ハチスンはこうした伝統の継承者であった。ハチスンは抵抗権と均衡政体の必要性を強調したが、アリスンはそれを独立革命以前のアメリカにおいて説いていた。アリスンは最高権力の権利について、こう述べている。「公共の利益がまずまず保全され、尊重される限り、重要性に劣る原因のために内乱ないし実力に訴えることはいかなる人々であれ正当ではない。しかし、公共の自由と安全がそれ以外によつ

⁵⁶ Sloan, pp. 90-91.

ては保証されないときには、統治の変更のために強力な努力をなすことは合法的であり名誉あることである。」⁵⁷

アリスンは国教会の進出が高まることを恐れて、中部植民地での国教会牧師の任命を妨げるように長老派を指導した。そのためにスタイルズとともに、ニューイングランドの福音派と中部植民地の長老派の連携に努力した。アリスンは均衡政体に関するハチスンの考えを援用して国教会に対する自らの反対を基礎付けた。「指導的人間の放縦を抑えるためには、共同体を構成する異なった種類・階級の間に統治の諸権力を配分し、ある階級・利害の権力をかきたて用いて、他の階級の違反行為を矯正することが有益であることが判明している。」⁵⁸ こう書いたのは大陸会議の20年前であった。

こうした対決と、母国に対する植民地の抗争とは、アリスンにおいては同じ抗争の二側面であった。アリスンは印紙条例に反対すべく長老派に働きかけた。彼自身は老齢ゆえに革命にきわだった活躍をしなかったが、しかし彼の弟子は独立革命において活躍した。チャールズ・トムスン (Charles Thomson) は大陸会議の書記官となったし、ジョージ・リード (George Read) とトマス・マッキーン (Thomas McKean) は独立宣言に署名した。ヒュー・ウィリアムソンは憲法会議のノース・カロライナの代議員であった。アリスンにとっては「キリストの王国」の推進と「自由、徳、学問」の促進は同じ仕事であった。ハウ将軍がフィラデルフィアを占領したとき、アリスンは自らの影響力ゆえに逮捕を恐れて逃げなければならなかった。

それではアリスンは、師ハチスンのような穏健派だったのか。それは穏健派の定義次第による。スローンのようにリーチマンに真の穏健派精神を見るなら、差異が際立つから、アリスンは穏健派ではないということになるであろう。ハチスンの同僚でグラスゴウ大学の神学教授であったリーチマンは、祈りの利点はそれが祈る人の精神に与える効果にあると説いた⁵⁹。しかしながら、アリス

⁵⁷ Cited in Sloan, p. 93.

⁵⁸ Cited in Sloan, p. 94.

⁵⁹ リーチマンの宗教観については、拙稿「ヒュームの宗教観とスコットランド啓蒙の精神的風土」、『甲南経済学論集』第31巻第4号、1991年3月、90-95ページを参照されたい。

ンの思想はハチスンにきわめて近く、ハチスンを穏健派とすれば、アリスンも穏健派として理解すべきであるように思われる。そしてリーチマンにより近いのはエドワーズであって、エドワーズもまたハチスンから大きな影響を受けたようであるけれども、ハチスンの政治思想は受け継いでいない。

穏健派というかどうかはともかくとして、ハチスンとリーチマンの差異は、アリスンとエドワーズの差異にある程度重なる⁶⁰。

4. 辺境の啓蒙と独立革命、建国

名誉革命以後、大ブリテンは、アメリカ植民地規制を強化した。競合する製造業を禁止し、海運を規制する母国の様々な法律はアメリカを強く拘束し、隷属を余儀なくさせるものであった。けれどもアメリカは農業の国であったから、製造業と海運の規制はいまだ深刻に感じなくてもよかった。しかしながら、英仏七年戦争（フレンチ・インディアン戦争、1756-63）の結果、フランスの北米植民地がほぼブリテンのものとなり、こうして北アメリカの大半が大ブリテンの主権のもとにおかれて以来、植民地への抑圧が重圧と感じられるようになった。この戦争で、アメリカは大ブリテンの一部として、フランス・インディアン連合軍と戦った。アメリカ植民地は女王陛下の勅許（統治契約）によるヴァージニア植民地なども、そうでないものも、一律、大ブリテン「議会の主権」によって従属を命じられ、課税されることになった。なぜそうなったのか。

英仏七年戦争は大戦争であった⁶¹。公債発行によって調達した戦費も強制動員された兵員も膨大であった。その結果、大ブリテンは、フランス領植民地を奪い、アメリカ植民地の大部分の宗主権を得たものの、巨額の財政赤字を生み出すに至った。従来にもまして大きな植民地を抱えた母国は、植民地防衛費の

⁶⁰ アリスンとエドワーズのハチスン受容の差異については、Sloan, *op.cit.*, pp.97-101を参照。ジョナサン・エドワーズの神学については森本あんり『ジョナサン・エドワーズ研究』、創文社、1995年がある。スコットランド道徳哲学との関係はほとんど問題となっていない。

⁶¹ Anderson, Fred, *Crucible of War: The Seven Year's War and the Fate of Empire in British North America, 1754-1766*, Vintage Books, 2002.

いっそうの増大も予想されたために、国家財政の負担を軽減するために植民地課税に踏み切った。しかしながら、母国の議会に代表権を与えられていなかった植民地は、一方的な従属の強化に反対して、国政への参加、植民地への配慮を強く求めるに至る。それを反逆と受け取った母国は「宣言法」(1766年)を出して、議会主権を植民地に突きつけた。こうして課税問題から独立革命論争が始まる。

その結果、アメリカにおける啓蒙思想は、牧歌的な農本的植民地社会の伸びやかな発展を展望する自由な思想にとどまることを許されず、期せずして、母国と対決しつつ、課税問題から独立革命、建国へと独自の課題を追求することになる。多くのアメリカ人は最初から独立を目指していたわけではなく、母国の側の妥協、穏健化に期待していた。しかしながら、もはや温情は通用しなかった。そこまで母国の財政状態は危機的であると認識されていた。アメリカに同情をよせるヒュームやスミス、あるいはプライス、バーなどの思想家やシェルバーンなどの政治家は少数であった。アメリカはやがて反逆を悔いて、援けを求めてくるであろうと母国の支配階級は予想していた。

こうしてアメリカ独立はシリアスな独自のコンテクストとなった。その独自性にアメリカ啓蒙思想のオリジナリティも根ざすことになる。フランクリン、ペイン、アダムズ、ジェファソン、ジェイ、マディソン、ハミルトン、テイラーなどのアメリカ啓蒙を代表する思想家たちが独立と建国をめぐって論陣を張った。スコットランド啓蒙を持ち込んだウィザースプーンやジェームズ・ウィルソン⁶²、エディンバラに留学した医師ベンジャミン・ラッシュェなど多数の啓蒙思想家も論争に関与し、前二者も独立宣言に署名した。

ウィザースプーン⁶³は、偶然ながら、アダム・スミス、アダム・ファーガスンと同じ1723年に生まれた。彼はエディンバラ大学でヒュー・ブレアとともに

⁶² 彼はセント・アンドルーズ大学で学んだ後、アメリカに渡り、ジョン・ディキンソンのもとで法律の研究をすることから法学者としての経歴を始めた。Hall, Mark David, *The Political and Legal Philosophy of James Wilson 1742-1798*, Missouri U.P., 1997を参照。

⁶³ ウィザースプーンについては、梅津純一「アメリカ啓蒙と宗教——ジョン・ウィザースプーンの場合——」、『聖学院大学論叢』第16巻第2号、2004年がある。

ジョン・スティーヴンソンの学生となった。すでに大学は専門教授制になっていたが、学生は誰かの登録学生にならなければならなかったからである。スティーヴンソンはレトリックと文学を重視した。弟子のトマス・サマヴィルは彼の講義を称賛している。カーライルは講義の全体を記録しており、それによると彼はフランスとイングランドの批評家、アリストテレス、ロンギヌス、ハイネキウス、ロックの著作を論じ、古代哲学史を講じた。またキケロとクインティリアヌスの修辞学について講義し、学生はドライデン、ポーブ、アディソンを読んだ⁶⁴。

大学にはアレグザンダー・カーライル、ウィリアム・ロバートソンもいたが、彼らはやがて穏健派となった。ウィザースプーンは、1734年以来、道徳哲学助教授となっていたジョン・プリングル (John Pringle) — 後に王立協会の会長となり、フランクリンの友人ともなる — の倫理学と政治哲学の授業にも出たかもしれない。プリングルはベーコンとプーフENDORFを重視したとカーライルは述べているが、キケロ、コモンウェルスマン、シャーフツベリ、ハチスンを含む、広範な古代と近代の権威を扱っていた。キケロについての講義はモラル・センス哲学との強い連続性を示している。アバディーンのビーティもキケロについての類似の講義を残した。ハチスン、スミス、リードと受け継がれるグラスゴウの道徳哲学とプリングルからファーガスン、D・ステュアートへと受け継がれるエディンバラの道徳哲学は、リードのもとで学んだステュアートによって統一される。スコットランドの道徳哲学者は、洗練と社会の進歩に関心を持ち、合邦によって生み出された自由主義に向かう社会に対して発言した。カリキュラムも同時代の大ブリテンの文化や社会問題を重視するものとし、大学の外でもスコットランドの文化を改善する様々な社会組織や社交団体に加わって活動した⁶⁵。

卒業後、ウィザースプーンは、穏健派と対立した伝統的なカルヴィニストの指導者となった。ウィザースプーンは『教会の特徴』*Ecclesiastical Characteristics* においてこのような方向性、穏健派の知的起源としてのハチスンをシャー

⁶⁴ Miller, *op.cit.*, p. 4.

⁶⁵ Miller, *op.cit.*, pp. 5-6. (以下 Miller とのみ表記)

フツベリとともに批判した。しかし、他方でハチスンにはウィザースプーンの『道徳哲学講義』の主要源泉であった。なぜウィザースプーンはスコットランド社会の自由化に反対しつつ、ハチスンが影響を与えたアメリカの自由主義的政治の擁護者となったのか。その理由は、人間本性についての穏健派の楽観的な見方、社会の調和的な把握に同意できなかったということにある。

古来、人間は人間にとって狼であるという立場に立つペシミズムの社会思想と、人間は教育、目覚め、あるいは信仰によって人間にとって神のような存在になりうるというオプティミズムの思想が存在した。ホッブズが前者から強固な社会秩序を求めたとすれば、シャーフツベリとハチスンは後者の理論を精緻化し自由主義社会を展望しようとした。狼(原罪)からいかにして人間を神のような、あるいは天使のような存在になしうるのか。人間のなかには他人以上に自分の欲望を満足させたいという私利私欲、権力欲などのような利己的な欲望と、自らを犠牲にしても他人に尽くしたいという友情、愛情、仁愛といった慈愛の感情がある。個人の努力で前者を克服して後者を行動原理にすることを説く学問が道徳哲学であった。他方、個人の努力には限界があるとして、安定した社会秩序を制度として構築する接近法も古くから存在した。政体論・国家構造論はそうした接近法である。とはいってもこれは人間本性と無関係というのではないし、例えば共和政体が機能するためには市民の徳が不可欠であるとされたことは、改めていうまでもない。

ハチスンはキケロの影響を受けていたが、モラル・センスの概念の形成にあたっては、シャーフツベリの影響が大きかった。シャーフツベリによれば、「すべての情念と感情の調和可能性、恒常性、規則性」を人間は持っており、それが「自身との関係と自ら以外の同じ種との関係における、個々の人間の秩序 (economy)」⁶⁶を生み出す。個人の利己的感情と社会的感情を調和させる「情念の秩序」は「個人の利益、各人の善を…一般的善に役立つように」はたらかせる「種の秩序」の小宇宙である⁶⁷。このように「公共の利益と自分自身

⁶⁶ Shaftesbury, *Characteristics, of Men, Manners, Opinions, Times* (1711), ed. by J. M. Robertson, Peter Smith, 1963. Vol. I. p. 291, 289.

⁶⁷ Ibid., Vol. I. p. 336, 338.

の利益」は「両立するだけでなく不可分である」⁶⁸。このようにシャーフツペリは倫理や政治を均衡、調和のような美学概念で把握した。シャーフツペリはこのように個人が理解する共通善、一般的善を党派主義に導く啓蒙されない狂信と対置した。それは教養をもった少数者の理性を評価する思想であって、民衆の声ではなく、そこにシャーフツペリの弱点もあった。

このような調和的な見解をハチスンに受け継いだ。ハチスンは倫理をモラル・センスの概念で把握し、政治と経済を美的な調和の概念で論じたから、社会集団の間に存在する対立や抗争を啓蒙されない私利の現れに過ぎないと理解する傾向が強かった。ハチスンの感情倫理学は、人々が徳、公正、人間愛を理解さえすれば、利害対立は回避可能であるという主張に導くものであった。したがって、要は啓蒙にあった。ハチスンは同感ないし同胞感情は家族の中から始まり、隣人、同胞市民、全人類へと広がると考えていたが、それは社会の現実を無視するものであって、シャーフツペリと同様の弱点を持つものであった⁶⁹。

18世紀のスコットランドは合邦によってイングランド化が進み、ローランドの発展は目覚しかった。しかし、ハイランドの発展は遅れ、スコットランド社会の差異は対立、紛争を引き起こした。とりわけ、ハイランドの封建的な氏族社会とハチスンのモラル・センスの機能する文明化した世界はあまりにもかけ離れていた。長老派教会にしてもハチスンたち穏健派と伝統的なカルヴァン主義者の間の亀裂が生じていた。

ミラーはハチスンと古代のシヴィック・ヒューマニストにはレトリックの理解に差異があったと述べている。レトリックと道徳哲学の二分野、すなわち倫理学と政治学は、アリストテレスやキケロにおいては不可分であった。18世紀においても道徳哲学とレトリックと美文学の関係は密接であった。道徳哲学は個人に関する主題（倫理学と心理学）、社会に関する主題（政治史・政治哲学、経済学、法学）、言語と文学にかんする主題を含んでいた。ハチスンは美的洗練を通じて同感的道徳感情を強化する研究分野としてレトリックと詩学、芸術を一体のものとして見ていた。しかし、これはアリストテレスやキケロなどの古典

⁶⁸ Ibid., Vol. I. p. 282.

⁶⁹ Miller, *op.cit.*, p. 8.

的なシヴィック・ヒューマニストのレトリック理解とはまったく異なる。彼らにとってはレトリックと道徳哲学は政治的行為、シヴィックな倫理学に関係する分野であった⁷⁰。

確かに、このような差異があったとも言えるが、しかし、ハチスンには道徳哲学においてやがて文明社会に出て公共的役割を担う青年の教育を重視していたことも確かであって、シヴィックな徳と政治的行為とレトリックを切り離したという解釈は浅いと思われる。ロビンズの指摘するようにハチスンはリアル・ウィッグとして政治的行為の重要性を十分に理解していた。専制政治に対する抵抗と革命はハチスンの思想の要である。しかし、ハチスンは社会の文明化、洗練、人間の感情の社会化、穏和化を可能とし、それに期待をかけていた。戦乱と革命に翻弄される乱世の繰り返しをどうすれば克服できるかという社会哲学の重大な根源的な問題はハチスンの念頭から離れなかったものである。かつて人びとが共和国を作り、平和な文化的生活を営んだ時代があった。そのようなヘレニズムの時代に範をとることは社会哲学者の義務でさえあるだろう。

こうしたハチスンと穏健派の感情の社会化論を空想的と考えた民衆派のウィザースプーンが、多くの争点で穏健派と対立するのは不可避的であった。しかし、最大の争点は地域の牧師の選任権をだれが持つかであった。名誉革命以来、会衆の権利と上流階級の聖職授与権者の権利の間で妥協はあったものの、この問題は明確には解決されていなかった。1750年代に聖職叙任権は政治的恩顧と関連するようになった。というのは、スコットランドにおける大ブリテン政府関係者たち(合邦完成派)が穏健派と協力してそれを地方政治の運営手段のなかに組み込もうとしたからである。穏健派は地方の教会に中央の強力な統制を及ぼそうとしたが、ウィザースプーンと彼の盟友である「正統派」あるいは「民衆派」(福音主義者)は自らの牧師を選任する会衆の権利を守ろうとした。その理由は、会衆に支持されない牧師を押付ければ、教会の社会的権威を弱め、その伝統的な民主的構造を崩壊させることになるというのであった。1751年の総会ではロバートスン、ヒュー・ブレアなどの穏健派は『異論の理由』(*Reasons*

⁷⁰ Ibid., p. 9.

of Dissent) を発表した。それは「穏健派宣言」と言われる。個人の問題では個人の良心に従うのが正しいが、「社会の成員としては、個人は多くの場合、社会の判断に従わなければならない」とロバートスンたちは書いた。彼らは良心の自由を無政府と同一視し、総会の判断を絶対化した。それによって彼らはジェントリと有力政治集団の支持を得た。こうして彼らは牧師選任に地域有力者の叙任権を通じて中央の統制を及ぼすことを総会に認めさせることができた。

ウィザースプーンたちは『異論の理由に答える』(*Answers to the Reason of Dissent*) を出し、個人の良心は権利であり、不可欠の義務である、なぜならそれはいかなる市民的権威も越える神の声だからであると応酬した。穏健派の絶対的権威を獲得し、良心の自由を破壊しようとする路線は、宗教的にも政治的に不適当である。最高の市民的権威でさえ、コモンウェルスの時代から国制によって制限されてきたのである。このように彼らは反論した。ここにはミラーが指摘するように⁷¹、コモンウェルスの伝統との連続性がある。

ウィザースプーンは『教会の特徴』(*Ecclesiastical Characteristics*, 1753) において、穏健派は自ら支配的党派になっていたが、正統派を党派主義の源泉だと攻撃したと皮肉をこめて述べた。穏健派の世論を敵に回し、上流階級の支持を得る戦略の結果、多数の脱会者が生まれた。ウィザースプーンは穏健派のキリスト教は貴族宗教になりつつあると見た。穏健派の文学的な洗練された説教は上流階級には、暗い正統カルヴィニズム以上に受け入れやすいものであり、こうして教会のジェントリ化が進んでいくと見えた。穏健派との対抗という文脈において、ウィザースプーンは教養指導層に訴えるハチスンとシャーフツペリの美的道徳論を批判して、公衆の権利を代弁したが、それは彼が急進的民主主義者であったからではなく、実際の公衆の敬虔に関心をもつ宗教的保守だったからである⁷²。

この保守性がアメリカにおいてウィザースプーンを革命支持に回らせた。穏健派の支持する社会の進歩、文明社会化、イングランド化、自由化は、大ブリテンの開明派の権力機構を介して、大ブリテンの帝国化と繋がっていたからで

⁷¹ Miller, p. 13.

⁷² Ibid.

ある。実際に、ヒュー・ブレア、ファーガスン、ジョージ・キャンベルなどの穏健派啓蒙思想家はアメリカ革命に反対した。スコットランド教会の保守派は国内外でより民民的であった。しかし、伝統的な保守のスコットランド人は懐疑主義者ヒュームを抑圧するように要求したし、カトリックに市民権を与えることに反対して暴動を起した。そうしたときに研究と思想の自由を擁護し、寛容を支持したのは穏健派であった。この穏健派がスコットランド啓蒙の主流となる⁷³。ハチスンの自由主義的な政治思想は穏健派に受け継がれて、保守的な政治行動を導くことになり、同じ思想がアメリカでは革命的になったのは、辺境としてのスコットランドとアメリカの社会状況が大きく違っていた結果である⁷⁴。

ニュー・サイドあるいはニュー・ライト (New Light) は1746年にニュージャージー大学を設立し、数年後にプリンストン大学と改称した。1768年に彼らはスコットランドで穏健派とのヘゲモニー争いに敗北したウィザースプーンを招聘した。アメリカに渡った彼は、コモン・センス学派の道徳哲学を講義した。その影響は大きかった。そのことから、アメリカに影響を与えたスコットランド哲学は、ハチスンからリードへと展開されるコモン・センス哲学であったというのが通説となっているが、実際にはそのような単純なものではなかった。アメリカではリード以上にハチスンが大きな影響を与えていたということは揺るがないように思える。そしてハーヴァードではハチスンは1725年以来教科書となり、ハチスンの影響を受けていたフォードアイスの『道徳哲学綱要』も1748年の出版以来教科書として用いられた⁷⁵。

スコットランドの啓蒙思想家の多くは、スコットランドが大ブリテンの一部となって以来、とくに古典的な遺産を再発掘し、古典政治学と道徳哲学を18世紀の文脈において文明社会の分析と構築のために建設的に受容しようとして、新たに自然法、道徳哲学、修辞学、歴史、政治学の形成を遂行したシヴィック・

⁷³ Sher, R., *Church and University in the Scottish Enlightenment: The Moderate Literati of Edinburgh*, Edinburgh U.P., 1985.

⁷⁴ Miller, p. 14.

⁷⁵ Miller, p. 18.

ヒューマニストであった。同じ大ブリテンの政治的・文化的地方、辺境として、アメリカ人はこのようなスコットランドの経験と思想に注目した。アメリカの啓蒙思想家にとってスコットランド啓蒙の成果は豊穡な知的道具箱であった。

ウィザースプーンはマディソン、ブレッケンリッジ (Hugh Henry Breckenridge)、テイラー (John Taylor)、フレノー (Philip Freneau) などに政治理論を教えた。独立宣言に聖職者としてただひとり署名したことで知られるウィザースプーンは独立革命に深くコミットしたが、彼はハチスンの抵抗権論を継承して、植民地の反逆の正当化論を説いた⁷⁶。かつての祖国が横暴な国へと墮落した時、大義を持った新しい祖国に加勢することは、ウィザースプーンにとって当然の正義であった。

5. 終わりに —— アメリカ啓蒙の意義

18世紀アメリカの思想と文化の総体を「アメリカ啓蒙」と呼ぶことは、次第に定着してきた。アメリカ啓蒙はヨーロッパから持ち込まれた思想の土着化を特徴とする。先住民インディアン知恵の入植者による継承という思想的モメントも最近では指摘されるようになって来たが、アメリカ啓蒙は、圧倒的にヨーロッパ啓蒙の遺産の上に成立した。しかし、歴史なきアメリカにおけるヨーロッパ啓蒙の継承は、その若々しさによって、独自であった。アレントに事寄せて言うならば、ヨーロッパ啓蒙はアメリカにおいて刷新され、新しい出発の理念〈自由の創設〉に再形成されたと言うことも可能である⁷⁷。

アメリカ啓蒙にとって、もっとも重要なトピックはアメリカ独立革命である。その思想的起源が、ロック自然法思想なのか、それともイングランドのカントリの共和主義なのか、ベイリン、ウッドの名著以降、アメリカの学界で激しく争われてきた。ベイリンやウッドは、ビアードからルイス・ハーツまでのロック自由主義の圧倒的影響を主張した通説を批判した。彼らはアメリカ独立革命

⁷⁶ Sloan, pp. 138-39.

⁷⁷ Arendt, Hannah, *On Revolution*, The Viking Press, 1963. 志水速雄訳『革命について』、ちくま学芸文庫、1995年。

の知的起源を辿って、政治権力の腐敗をめぐるイングランドのコートーカントリ論争のある種の再版をアメリカに見出したのである。

アメリカ啓蒙を代表する思想家としてジェファスンとマディソン⁷⁸は、ピアードを批判したアデアの研究以来、共和主義者として解釈されてきた。アデアはジェファスンの農民共和国論のルーツをアリストテレスの共和国概念、すなわち有徳な自由人＝自営農民の共同体に求め、マディソンとジェファスンはさらに「共和国は大国に適す」とするヒュームの近代共和国論を媒介としてそれをアメリカに適用したという解釈を提出した。アメリカに与えた思想的影響について、ロックにもましてスコットランド啓蒙を重視する解釈もアデアに始まる⁷⁹。ジェファスンはウィリアム・スモールから、マディソンはウィザースプーンからスコットランド啓蒙の遺産を学んだ⁸⁰。アデアによれば、二人のヴァージニア人の農本主義は独立自営農民（ヨーマン）と自由国家の関連を重視する政治的農本主義であり、彼らは共和国の理想的な市民を生み出すものとして農本的生活に関心をもっていた⁸¹。フランクリンとハミルトンは都市の商工業を重視したが、総じてアメリカの啓蒙思想家は農民の簡素で有徳な生活を讃美した農本主義者であった⁸²。

アリストテレス以来、農耕生活はしばしば賛美されてきた。キケロもまた農耕生活は最も高貴な仕事であると考えている。チューダー・ヒューマニストのサー・トマス・スミスは『コモンウェルス論』において、国家へ最大の貢献をする独立自営農民（Yeoman）論を説いたが、その基礎にはキケロの思想があった⁸³。こうした伝統思想を継承した農本主義の国を作るのにアメリカほど適し

⁷⁸ マディソンの共和主義については、中野勝郎「ジェイムズ・マディソンの共和制観」、田中・山脇編『共和主義の思想空間』名古屋大学出版会、2006年所収を参照。

⁷⁹ Adair, Douglass G., *The Intellectual Origins of Jeffersonian Democracy*, Lexington Books, 2000 (written 1943). アデア、フィンク、ロビンズにはじまりやがて「共和主義総合命題」と呼ばれるに至るアメリカにおける共和主義研究の系譜については本書に寄せられたアップルビー Joice Appleby の序文が手短かに描いている。

⁸⁰ Adair, *op.cit.*, pp. 24-26.

⁸¹ *Ibid.*, p. 18.

⁸² Commager, *op.cit.*, p. 243.

⁸³ Fitzmaurice, Andrew, *Humanism and America*, Cambridge U. P. 2003, p. 24.

た国はなかった。広大で人口のまばらな未開墾の土地がアメリカには存在したからである。アメリカでは古代と近代が重なった。

ジェファソンは、1760年から62年にかけてウィリアム・アンド・メアリ大学で前述のようにスモールによって教育された。スモールはアバディーンのマーシャル・カレッジの卒業生であり、1758年からウィリアム・アンド・メアリ大学の自然哲学教授として6年間、主に数学と自然哲学を教えた。スモールは学長になれずに失意のうちに大ブリテンに帰国し、バーミンガムのルナー協会に関係した。帰国に当たってスモールはウィリアム・アンド・メアリ大学のために科学器具を買い求めるという役目を負っていた。ジェファソンはスモールを父のように慕った模様であるが、寛大な精神の持ち主として、スモールが倫理学、修辞学、文学を教えたことを記している⁸⁴。

ジェファソンは、1781年に執筆した『ヴァージニア覚書』でこう書いた。アメリカには「農民の勤勉を誘う無限の土地」がある。「すべての市民が土地の開発に従事するのが一番いいのだろうか。それとも、市民の半数が農業をやめさせられて、他の半数の人々のために製造業と手工芸芸とを行なうのが一番いいのだろうか。」このように問いを立てて、ジェファソンはこう述べている。「もし神が選民をもつものとすれば、大地に働く人々こそ神の選民であって、神はこれらの人々の胸を、根源的で純粋な徳のための特別な寄託所として選んだのである。…耕作者の大部分が道徳的に腐敗するという現象は、いまだかつてどの時代にも、またどの国民の間にも実例のあったためしがない。道徳の腐敗は、農民のように自分たちの生存のために天に頼り、自分の土地や勤勉に頼ることをしないで、自分の生存のために顧客の不慮の災害や気まぐれに依存しているような人々に捺されたしるしなのである。依存は追従や金銭絶対の考えを生み、徳の芽を窒息させ、野心のたくらみに都合のよい道具をつくり出す。」⁸⁵

「農民以外の市民階級の総計と農民の総計との比率」が不健全な部分と健全な部分の比率であり、腐敗の程度を測るバロメーターであるとするジェファス

⁸⁴ Sloan, p. 246.

⁸⁵ Jefferson, Thomas, *Notes on the State of Virginia*, Penguin Books, 1999, pp. 170-171, 中屋健一訳『ヴァージニア覚え書』岩波文庫, 1972年, 297頁。

ンは、都市を嫌悪し、農民共和国こそ、生き生きとした有徳な共和国であると考えた。しかしジェファソンは自給的生活を主張したのではなく、自由貿易を擁護した。「あらゆる国の平和と友情とをつちかうことにわれわれは努力すべきであり、われわれをもっとも傷つけてきた国に対してさえも、その国に反対するわれわれの主張が通ったあかつきには、同様の態度で臨むべきなのである。通商の扉を開き、通商上のすべての拘束をとり払うこと、いいかえればわれわれの港に運び込みたいと思うものを何でももちこむための完全な自由をすべての人間に与え、同じことを相手側にも求めることが、これからのわれわれの関心事となるであろう。」⁸⁶

独立自営農民 (yeoman) を重視するこの農民共和国論は、産業そのものとしての農業賛美ではなく、政治的な観点からの議論であり、有徳な生活を可能にするものとしての農業賛美であることは注意を要する⁸⁷。このような農民共和国はハミルトンの認めるものではなかった。やがて1792年には、ジェファソンとハミルトンの確執が始まる。その根底には異なる国家ヴィジョンがあった。すなわち、農本主義的自由貿易論⁸⁸と製造業・保護主義の重視という対立である。ジェファソンの農民共和国論はテイラーなどの農本主義に受け継がれ、アメリカでは当分は主流であった。ジェファソンは奴隷制度に反対であった。にもかかわらず、彼は多数の奴隷を持っており、プランテーションでも家庭でも奴隷とともに暮らし続けた。それはどのように理解すべきであろうか。

啓蒙時代のアメリカは基本的に農本的社会であった。しかしながら、植民地アメリカには、農業のみならず各種の商工業も生まれ、土地の豊饒さに加えて勤労による豊かな富に恵まれつつあった。そのような富を基礎にして啓蒙の文化が花開きつつあった。すなわち、啓蒙の装置としての大学、各種のクラブや

⁸⁶ Ibid., p. 180, 同上, 312頁。

⁸⁷ Adair, *op. cit.*, pp. 18-19. 明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』（ミネルヴァ書房, 1993年）は包括的な研究であるが、農本主義的共和主義者で、自由貿易論者でもあったジェファソンについて本稿と共通の理解を示している。

⁸⁸ ベイリンは、ジェファソンも次第に国内市場向けの製造業の意義を認めるようになったという指摘をしている。Bailyn, Bernard, *To Begin the World Anew: The Genius and Ambiguities of the American Founders*, Alfred A. Knopf, 2003, p. 51.

協会、出版とジャーナリズム、政党政治、植民地議会、州の自治政府などが目覚ましい発展を遂げていた。マディソン、ジェイ、ハミルトン、ジェファソンなどはフランスとブリテンの啓蒙思想によって育てられたアメリカの建国者であった。フェデラリストだけでなく、反フェデラリストも啓蒙の影響下にあった。フェデラリストがより自由主義的であったとすれば、反フェデラリストはより共和主義的であった。啓蒙の課題はいずこにおいても専制との闘い、そして自由の確立、自由の拡張にあったが、植民地アメリカにおいては母国の頑迷な専制支配、母国の議会主権とのたたかいこそ最大の課題であった。

しかし、母国ではすでに課題となっていた奴隷解放は植民地ではいまだ必ずしも課題とは意識されなかった。1760年代からのクェーカーの奴隷貿易廃止運動に始まり、クラークスンやウィルバーフォースなどによって先導された奴隷解放論は、1803年になってようやく結実を見る。植民地では、フランクリンのフィラデルフィア、ペンシルヴァニア州ではいち早く、奴隷解放が宣言されていた。けれども、圧倒的多数の州は無感覚であった。奴隷制がアメリカ人の精神の根底に腐敗をもたらし、それが深く広く文化に浸透しつつあった。加えて、現地人、インディアンに対する排除と抑圧という問題もある。それは皮肉な事実というに留まらず、アメリカ啓蒙が欺瞞的であったこと、少なくとも二面的であったことを意味するであろう。

それは共和政が奴隷制生産様式を物質的基礎としていたという古典古代の伝統がいかに近代をも拘束していたかを物語る。モンテスキューの高貴な政治学は奴隷制社会に沈黙を守った。アメリカの奴隷制度は植民者が持ち込んだ制度に他ならない。モンテスキューも語っているように、熱帯における植民地経営は身体能力に勝る黒人によってしか行なえないという常識があった。その常識はスペインのコンキスタによって生み出されたものと思われる。すなわち、近代において奴隷制を最初に復活したのは、スペイン人であった。大航海時代の航海と探検は、未知の世界への好奇心に始まったが、それは同時に財宝の探求でもあった。一歩先んじたのはポルトガル人とスペイン人であった。コロンブス航海記が示しているように、彼らには旅先で出会う未開人が人間であるかどうかかわらなかつた。とりわけ、スペイン人は中南米の征服において、インディ

オを捕虜とし、鉱山で奴隷として使役した。こうしてヨーロッパ近代は植民地という自ら支配する外部において掠奪をほしいままに行なった。このコンキスタはまさに奴隷の命と引き換えに莫大な金銀を本国にもたらした。それは搾取以外の何ものでもなかった。

そしてこのスペインの先例が植民地に全般的に伝わったのである。当初は現地人を奴隷とすることによって始まった植民地は、やがてインディオの命を使い尽くし、次にはアフリカから黒人を大量に輸送することによってまかなうとともに、拡大する段階を迎えた。遅れてアメリカ、カリブ海域に入植したイングランド人やフランス人は、金銀の鉱山ではなく、砂糖と米、コーヒーなどの作物を生産する植民地を設けた。こうした植民地はヨーロッパと各国の国王の栄光を増すという高貴な目的を記した特許状を得て開始されたとしても、高貴なものではおよそなかった。ヨーロッパ人の強欲、獲得欲こそ真の動機であった。航海は好奇心に始まったとしても、それは直ちに財宝の探求となり、強欲の追求に転化した。

奴隷によって支えられた自由な社会として、古代ギリシアとローマと近代のアメリカは同類なのである。ヨーロッパ移民の定住が始まった17世紀初頭の先住民インディアンは300万人から400万人であったと言われる。西洋による征服と文明化によって駆逐され、同化を強いられた結果、インディアンはほとんど滅んでしまった。それは日本における先住民アイヌの運命を想起させる。黒人奴隷の境遇も悲惨であった。南部の綿花プランテーションなどで酷使された黒人奴隷の多くは、アフリカで買われるか捕獲されるかして、大西洋を横断してつれてこられた。その数は数百万人に達する。1790年の合衆国の人口は400万人、うち奴隷は70万人であった。

自由な国、アメリカを宣言した独立革命と合衆国憲法の精神のレトリックが、このような事実を隠蔽していたとすれば、アメリカの政治社会思想は、その共和主義精神でさえ、すでに出発点において、腐敗墮落し、欺瞞的な二枚舌を駆使していたことにならないであろうか。本音と建前を使分ける欺瞞はアメリカが母国に対して告発した腐敗ではなかったか。権力は腐敗するという故事さながら、アメリカの権力者もまた徳を失い、権力の横暴の魔力に捉えられてきた

のではないか。腐敗は今日にまで至るアメリカの主流派の精神を蝕んできた元凶ではなかっただろうか。

自由と平等を謳歌したアメリカは、移民と難民を寛大に受け入れる希望の国であった。しかしながら、アメリカは溢れんばかりの豊穡の恩恵が人民にゆき渡る地上の楽園とはならなかった。それどころか、南北戦争による奴隷解放は、その後も黒人差別を公然とゆるすものであったし、少数民族への差別と抑圧は民主主義の国アメリカの今日に至るまで、現実に他ならない。ワスプの支配するアメリカは、その後、第一次大戦を経て、並ぶものない帝国となって、世界の平和と繁栄のためにという大義名分を掲げて、他国への軍事的支配・介入を繰り返して来た。20世紀後半から21世紀にかけて、世界の荒廃の元凶となってきたのは、皮肉にもアメリカではなかったか。その淵源は、アメリカ啓蒙の欺瞞性に遥か発しているようにも見える。文化と思想においてアメリカは今ようやく多文化主義の時代を迎え、アメリカの歴史の見直しも進み、少数民族なども発言権を持つようになってきたが、しかし、ヴェブレンの恐れた「先祖がえり」がいつ起こらないとも限らない。ワスプがかつて抱いていた人種的偏見が本当に払拭され克服されたと信じてよいのだろうか。

今日、アメリカは自由と民主主義のチャンピオンであるとともに、帝国として世界に大きな影響を与えている。アメリカを帝国とした原型は、古矢旬によれば、フレンチ・インディアン戦争に遡る。「この戦争を通じて、アメリカがイギリスという帝国から独立して、イギリスとは違う意味合いでの「帝国」として発展していく原型が形作られていった」⁸⁹と言う。英仏七年戦争は、世界史的には新大陸、インド、アフリカにまでわたって戦われた大ブリテンとフランスの覇権争奪戦争であり、フレンチ・インディアン戦争はその一局面に過ぎなかったが、しかし、アメリカ史においてはアメリカの植民者によるインディアンとの戦争であり、移民による先住民の排除と虐殺であった。合衆国憲法は連邦議会の議員選挙権から「納税義務のないインディアンを除外」⁹⁰した。従来帝国は先住民を生かして支配したが、アメリカでは先住民を抹殺して、

⁸⁹ 古矢旬『アメリカ 過去と現在の間』、岩波新書、2004年、43ページ。

⁹⁰ 宮沢俊義編『世界憲法集』第4版、岩波文庫、1983年、34ページ。

「誰もいなくなった空白地帯に、海を越えてイギリスのひな形をそのまま植民させた」という新しさがあつた。古矢が言うように、アメリカは「他民族支配や他民族共存のシステム」としての「古い帝国」に比して、「文化的画一性への強い志向」をもつ「新しい帝国」であつた。

この時期の建国の父祖たち、フランクリン、ワシントン、ジェファソンも実際にアメリカを「帝国」、「新興帝国」、「自由の帝国」と呼んだ。彼らの意識において、アメリカは「帝国」でなければならなかつた。独立によって彼らが否定したのは、大ブリテン「帝国」そのものではなく、その腐敗であつた。したがつて、彼らは、母国大ブリテンの腐敗を弾劾し排除することによって母国に代わつて「帝国」と文明をアメリカにおいて継承し、再生しようとしたのであり、独立の行為は「分離」であるとともに「継承」であつた。

その延長上に今日の「帝国」アメリカがあることは否定しがたい事実である。そのような側面を無視して「アメリカ啓蒙」を讃美することは本稿の意図ではないけれども、だからといって、ヨーロッパから受け継ぎ、独立革命の精神へと結実していった「アメリカ啓蒙」の普遍的意義までも否定する必要はないであらう。今、アメリカも、啓蒙の父祖の遺産にもう一度目を向けるべきときであらう。